

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年  
10月号  
通巻650号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年10月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監製  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



昭和42年・片山津開拓地(石川県)での座談会(文・7頁)

**再録** 昭和23年11月～昭和24年4月『大倭(おほやまと)』より

## はら たた 法主日聖の肚を叩く

法主 矢追日聖 (満36～37歳)

今回紹介するのは昭和23年10月に創刊された機関紙『大倭』に「法主日聖の肚を叩く」という表題で連載していた法主様の文章を再録したものです。現在の大倭大本宮(大倭紫陽花邑)を宗教活動の拠点にせよとの霊界からの指示によってこの地に遷ったのが同22年10月30日のことでしたから、それからわずか一年ほどしか経っていない時期の文章です。

大本宮にはまだ電気も水道も入っておらず、ランプと池の水が頼りの生活でした。住居も掘っ建て式の簡素な藁葺き小屋で、雨漏りしたり虫が湧いたりするような状態だったとのこと。

そうした中で、敗戦直後の厳しい世相を反映した生々しい相談に法主様が答えていた様子が今回の文章から想像できます。

当時の大倭の状況について法主様が書かれているものがあるので、少し長いですが引用させていただきます。

《大本宮に遷ったとき、親しく光明皇后と挨拶を交わし、家族の契りを結んだのである。私は皇后の座(神社)を造ろうかと言え、彼女は軽く辞退しながら、「姫がかつて世に在った時の心を嗣いでほしい。」

今日ある日をどんなに待ち侘びたことか、法主と一体の形で精進する」といわれたので、事情の如何をとわず、相手を選ばず、来る者をして大倭の一門に迎えたのである。

大倭の一つ財布に一つ釜といった大家族集団生活の源流は、こうしたところか

ら自然発生を見たのであるが、これは単に光明皇后の意志だけによるのではなく、神ながらの社会の実体だったからである。

彼女が私に向かって紫陽花の花を示して「地下水の如く清く流れ、紫陽花の如く美しく咲け」と言われたので「紫陽花邑」と名づけたのである。

昭和二十三年、私は地元富雄村民生委員、児童委員の常務委員に選出されたので、村内一戸残さず生活の実態調査を始めた。生活保護法の適用はなっていないかった。社会の底辺にあって泣く「よそ者」も、かなり掘り出すことができた。二十六年までこの仕事をつづけたため、郡や県等、福祉関係の人々と親しく交流する機会を得た。

この年の後半の街頭布教は主として門弟達がつてくれた。

その理由の一つは、家の子の員数はふえる一方だったから、やむなく私は陣頭指揮をとり、真剣に朝星夕星をいただいて、牛の尻を叩くことによつて、生活を維持しなければならなくなつていった。保護家庭よりも、遙に私の方が惨めであった。こうした世俗の業の間をぬつて、保護家庭の指導や、二十一年に本教所属法人として設立した数ヶ所の教宮の所へも、教化伝導に繁々と足を運んだ。

十月、信人達の要求によつて、本教機関紙『大倭』の創刊号を出したのである。この頃から信人の生活相談に応じたため、難病、奇病等むりやり情的に扱わなければならぬ実情になつてきた。大本宮へ野山を越えて訪れてくる信人もちらほら現われた。腰を下ろして対談する世間並の家屋すらなかつたので、田の畔に藁束を置き、野良着のまま話したのが、今も想い出の一つになつている。『野草社』『やわらぎの黙示』2222〜2224頁)

なお、『大倭』に載つた法主様の原文では、旧

字体の漢字や旧仮名遣いなどが多用されているなどの点があるので、読みやすさに配慮して適宜改めています。(編集部)

## 尼さんの恋？

(昭和23年11月4日)

家子 この間、ある新聞に「尼さんは恋をしてよいのでしょうか？」という記事がありました。タアサン、これについての意見はいかがですか？

日聖 ニさんだつて人間だ、喜怒哀楽を感じる人間なんだ。腹が減れば飯も食い、五体が完全なれば性欲もあり、男恋しくなるのもあたりまえのことだ。何も不思議はない。

家子 それなのに尼さんはなぜ独身でいるのですか。

日聖 俺にはその真意は分からぬ。だが、仏教では昔から禁欲生活を讃美している。もちろんそれは出家の人々に対してだが、俺の経験から考えるとつらいことだと思ふ。

家子 タアサン、えらい同情ですな。つらいことはよく分かりますが、尼さんの立場としては我々よりも更に苦痛な面もあると思います。

日聖 そうだとも、御出家様だもの。世間の人は金の糞でもたれ甘露のような小便でもこいているような聖人偉人と思つている者も多い。ある管長の入った風呂の湯をありがたいと随喜の涙で飲んで、極楽へ往生出来ると喜んだ信者も現今あると聞いている。信仰に生きている者は本当にそれ程徹底していかえつて幸福なんだ。信者がそのように熱心だから尼さんの立場も苦しいんだ。完全に人を偽つた二重人格の生活をしなければならぬいからなあ。中には「私は男がいなくても、ちつとも不自由ではありません。こうした仏道修行が無二の楽です」と言う尼さんもあるが、ちよつと

色気のある話をする態度が落ち着かず顔を赤らめたり、急いでその話を変えようと焦る。俺は偽る心を憎む、だからわざと話しかけてやるのが常である。尼さんの女としてのたしなみとも受け取れるが、外観を飾るのは女性の本能の現われの一つと見る。

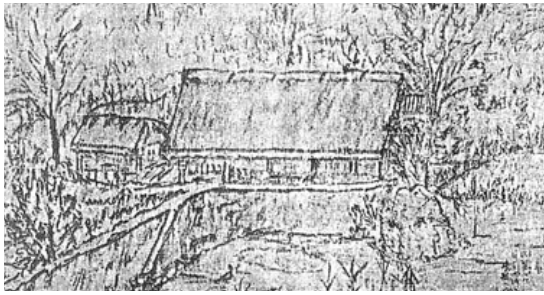
家子 それでは、尼さんも恋をしてよいのですか。

日聖 あたりまえだ、偽つた人生は苦しみである。限りある短い人生の何を苦しんで暮らす必要があるか。神は動物植物一切のものにその子孫を残すべく陰陽が造られてある。もし子孫を残す行為が苦痛になれば、一切のものは地球からその姿を消してしまふようになる。人類も滅亡の時だ。そこで神は性の本能を与えてある。ゆえにだ、性の神秘を享樂一本に使つては神意を無視していることだし、禁欲生活を神聖と考えることも神意の冒瀆だ。俺はあの線香の薫る仏間の一室にやるせない思いを抑えながら寂しき夢を結ぶ幾多の尼さんの日々思いを走らせた時、仮面を脱いだ人間としての尼に帰れと言いたくなる。正直であれ。偶像に礼拝するよりも異性を知ることの方が更にありがたく、尽きせぬ喜びがあると思う。肉体を持つ人間尼さんなればこそ肉体ある異性が最も恋しくありがたいのが偽らざる人間性なのだ。尼さんよ、将来の幸福のため責任ある恋をしなさい。

## 陰の身に泣く女性(昭和23年12月4日)

ある日の午後である。中年の女性が大本宮を訪れた。何だか沈んだ心配そうな面持ちである。畑で作業しているタアサン(教長親父Ⅱ法主)を呼ぶ。泥足を洗つて破れた仕事服のまま客人に会われた。





炎上せる大本宮仮住家（日聖畫）  
昭和24年9月4日発行『大倭』第9号より

大抵のことには率直に答える日聖親父さんであるが、さすがにこの問題だけは少し考えている様子であった。一文字に結んだ口はほほ笑みと共に開いた。日聖 それでよい、それでよい。いい、それでよい。日聖 先生!! 本当ですか? これでもいいのかしら……(婦人は泣いていた)。日聖 敗戦後の社会問題として、この種の事が相当多い。多

婦人 初めてお目にかかります。先生のお話を街頭でお伺い申して以来、私のこの心境をぜひ先生にお聞き願って日頃悩む暗い生活をお助け願いたいと思ひまして、実は思ひつめて先生のもとへお邪魔に参った訳でございます。日聖 で、その事情というものは? 婦人 私はもう30歳で子供もある身です。子供を育てたいばかりに、誠に申すも恥ずかしくて……。実はある美業家の陰の身として生活の保証をしていたらしております。子供の罪のない安らかな寝顔を眺めては今の私のこの生き方に「これでもよいのだろうか、神様許してくださいましょうか」と悩みの明け暮れでございます。先生、どうかはつきりとその善悪を聞かせていただきたく存じます。

くの女性はあなたと同じ道を踏んで泣いている者もたくさんあるようだ。しかし、こうした境遇にうめく女性に対する救済の法律も、また適当な社会施設もまだ無いようだ。もちろん母子寮もあり生活保護法もある。だが、現今の社会情勢の上から見てこうした施設によって救済される者はほんの一部分に過ぎないと思う。過去の道徳として一夫一婦になつていくの。小きき過去の道徳観に囚われ我ら同胞が苦境に陥つてそれを傍観するは許されない。大きい立場において日本人全般の幸福を祈り願わねばなるまい。今の普通な家庭生活を営んでいる人たちは素行不良な女だと笑うかも知れない。だが、それは時代に対する認識不足と言いたい。産まれると同時に生きるということこそ神は保証している。真に親子生さんがためにあなたとしてそれ以外に方法がなかったとすれば、それは決して罪とはならない。むしろ生活苦から一家心中する方がその何倍か神を冒瀆しているかも知れない。だが、あなたもそうした境遇に甘んずることなく更生の道に常に努力しなさい。必ず神は助けしてくれる。

婦人は明るく複雑な過去を更に語り続けた——  
**政治と宗教** (昭和24年1月4日)

夕食を済ませた頃、農家のオッサンが見えた。薄暗いランプの光で火鉢を囲みターアサン(法主日聖)を中心に雑談が交わされた。客 先生また選挙だんな、誰に入れたらよろしおまっしゃろ。日聖 さあ、俺にも見当がつかない。だが、国家の制度を無視して棄権するわけにはいかん。

客 セやけど先生、誰が出たかてアメリカさんに押さえられていたら同じことだっせ。日聖 いかにもアメリカの支配下にあると言っても、よい政治家を国会に送らなければ国民がつまらないよ。誰が出てもやりにくいのは今の世だ。これは政治家のみの責任でない、その半分は国民にもあるはずだ。こんなに世相が悪化しては良心的な政治家は出ない。今の我々国民はちょうど政治家のオモチャのようだな。

客 先生つまらんことだんな、供出はやかましく言われるし、ちよつと聞やりに叱られるし、それに大臣や偉い人々が大闇をやっている。世の中が一体どうなりまっしゃろか、弱い者倒しだんな。買物物は闇だし、供出は公定でやり切れまへんな。

日聖 これが今の世相だよ。日聖も何とかして国民一般の誰もが喜んで住みやすい現世樂土を造らんとこの身を神に捧げているんだ。まず汚れた人間一人一人の心の垢を洗い清めなければならぬ。客 先生が政界に出ていただければ世の中もよくなりまっしゃろな。出てくださったらどうです。

日聖 日聖は出ない。出なくとも日聖には更に大きな神から与えられたお役目があるのだよ。今のところお前には分からんが、後で分かる日があるよ。世相の悪化、それにつれて強盗殺人その他悪質犯罪の日増しに起こることは、そこに我々の見る大きな原因がまたあるのだよ。それは日本の過去において戦争その他のために世を恨み、また人を呪つて死んだ幾多の亡霊が霊の世界において逆の働きをなし、時代の人心を霊の世界から惑乱させていることだ。こうした邪霊がある限り、我々の住むこの社会は何をやってもうまくはいくまい。一家の家庭でもその先祖に迷える霊があれば、その家の者が絶え間なく病気になるつたり、貧乏し

て家が潰れたり、また問題を起こすような子供が産まれたりする。人間でも心の悪い人はその体を悪い方に使い、善い心の人は同じ体でも善いことに使うものだ。政治家はこの表の人間世界を治め、宗教家は裏の霊の世界を治めて初めて表裏一体の平和な国家社会が生まれるのだ。だが、こうした宗教心が政治家になくはならないし、また宗教家も政治性を持たねばなるまい。

客 では先生、将来はどうなさるつもりですか。

日聖 霊の世界を治めるために大乗教という宗教を創めたのだ。そしてこの宗教によって人間個人個人の魂を洗い清め邪霊を鎮めると同時に、神意に沿う現界の不幸な人の救済にあたり社会事業を伸ばす。子供をここに多く収容していることも専門的宗教家の養成のみでなく、宗教心を持つ政治家・教育家・科学者等を作り上げ、20年後の社会のあらゆる層あらゆる面に送り出し平和国家・社会を建設するという夢を持っているからだ。

## 踊る宗教とは？

(昭和24年2月4日)

客 先生、この度「踊る宗教」が大阪の松坂屋へ来ましたで行ってみました。教祖は背広姿で一つも神々しいとか宗教家だという気がしません。しかしこの俗な姿でなければ、俗な社会人を救えないと教祖は言われるのです。でもキツネの首巻きを見た時、宗教家はこれでよいのでしょうかと私は教祖に問うてみたくなりました。

日聖 それも一応の理屈としては聞かれるが、内容は外観に表れるものだ。鼠に猫の皮を着せても猫にはならない。俗人に法服を着せてもそれは宗教家ではない。要はその人の天賦の使命とその人の魂に帰結する問題で、外観はさほど問題にする必要はない。だが、形ある世界においてはまず外

観から出発するものだから形の方も重視する必要がある。宗教家が真に宗教的社会救済の使命を自覚するならば、自ら俗人の姿に変えなくとも一見宗教家の姿において善導救済の方法を講じたらよい。姿はいかようなりとも、大衆が真に宗教家として信じた場合は救いを求めて来るものだ。決して姿によってついて来るものではないからだ。

客 教祖を大神様と信者は呼んでおられる。生きておられる教祖に大神様などと呼んでもよいのでしょうか。

日聖 教祖大神様には日聖はまだ会っていないから何とも言いようがないが、信者たちが大神様の化身だと信じ、その肉体から後光が輝いているように見える程絶対的に信仰を捧げている人なら、教祖大神様と呼んでもよいだろう。また、神は人を通して人を使ってその神威を顕されるものだから、肉体を持つ人間が神の化身というその肉体に蔵せる絶対神格に対しては、大神様と称えてもよいだろう。だが、こうした神格を持った人なら、真に神人合一の心境に達している人なら、衣食住その他あらゆるものが超人間的で謙虚な飾り気のない味を持っているものだ。教祖大神様と呼ばれても、恐らくこの教祖は不愉快を感じておられるものと思うが、もしそれに甘んじ悦に入っているようならば、それは化物だ。

客 踊ったり手を振ったりして、まるで夢の国をさまよっているようです。涙も出なければ感激も湧かない。踊らない人はまだまだ我があるからだ。と教祖は言われる。無我の境地とは夢のような世界でしょうか。

日聖 手ぶり足ぶりで踊るその話によれば、それも一種の靈動に相違ないが、靈動は我があり反抗心があり疑惑心があっても発動するものだ。強い靈気で誘導すれば、肉体にある霊が通常以上の躍

動を始めて全身の神経系統を刺激し肉体の運動が自然に起こるものなんだ。だが、人によって靈力の活発な者と然らざる者があるから、十人が十人同時に靈動するとは断言出来ない。また、その人によって靈動の方法も別々である。法悦の境地に導き宗教的安心を与える場合は我があつてはならない。だが、我は悟りへの前提なんだ。靈動は悟りの境涯に導入する一方法としては確かだ。

## ダンサーの立場

(昭和24年3月4日)

客 1月中頃に「彼女たちは語る 婦人警官からダンサーへ」と題して大阪新聞にあった記事ですが、食べるために婦人警官や学校の先生からダンサー、女給に転向してゆく現代の女性の立場を先生はどうお思いになられましようか。

日聖 こうしたことを見聞きする度に涙が出る。現今のような社会情勢下にあつてはこうした事実の存することはむしろ当然と言える。職業には貴賤上下の差別はないが、ダンサーと言えば何だか下劣な大衆の慰安機関のように思っている人々も相当多い。将来に希望多く光明を求めている若き女性がこうした稼業に転向していくことも、食わんがため生きんがための唯一の道と信じたからだろう。女性としての仕事も幾らもある。幾万の女性がダンサー以外の職業で生きている事実もある。しかし、ダンサーでなければ生きていられない境遇にある女性の方々には心から同情する。生活問題によって若き女性に将来への希望や光を失わせることは、母性を担う女性の役割を損ねることだから社会的大問題として取り上げ、大いに考慮しなければならぬことだ。

客 では先生、中年の未亡人が可愛い子供を立派に成人させ大学に上げんがため、身はダンサーあ



るいは女給、時には男性の誘惑をも受け入れ子供に捧げた場合、その未亡人の愛は立派なものでしょうか。

日聖 大自然神の道は陰陽男女をもって一体として成り立っている。男にしても女にしても孤独でいる場合は不自然であり神への反逆行為なんだ。女性が男性なくして社会に生きんとした時、必ずそこに不安があるはずだ。子供のために親が犠牲になることは自然である。今の社会には子を持つ中年の未亡人が多い。だが、実際問題としてこれら未亡人の本能的性欲の満足と経済的安心を与え身心共に救済する方法はいまだ誰もが発表していない。幸福を求め幸福に生活をする特権を神は動物全般に与えられているものだ。仮に二号的立場であっても、子供の将来を保証され未亡人自体がそれによって身心共に救われるというような美しいものなれば、それは許してもよいと思う。もしこれを道徳的に考えて不可とするならば、こうした立場の女性を救済する今以上の方法を見いだした時に初めて言えることなんだ。

客 先生、あまり若き女性や未亡人に自己安心を与える、ますますこういう傾向を助長させは致しませんか。

日聖 女性の本質から言って、ダンサーや二号的婦人へ転向することに喜んで飛び込んだわけではないことは明らかだ。敗戦後の社会情勢がかかる道を歩ませるのだ。だが、若き女性にしても中年の未亡人にしても常に将来に対する希望と喜びを持ち、晩年の幸福への準備が必要なんだ。とにかく、現在の若き女性は将来というより目前の享楽を求め、自由を放縦と誤って墮落する傾向にあることは確かだ。こうした若き女性は生活もかなり恵まれているが、ここに取り上げた環境の女性においては大丈夫だよ。

### 産めば我が身飢ゆ？(昭和24年4月4日)

婦人 「産めよ、増えよ、地に満ちよ」とは神の言葉と聞いておりますが、私の主人は障害者で、いまでも食うだけでやっとなのに産制に失敗、また妊娠してしまいました。出産すればその費用だけでも1万円以上はかかります。墮胎すればと、主人と夜々語り合うのですが、私の良心がとがめます。かといって産めば、また生活の苦しみ。一体先生、どうすればよいのでしょうか。

日聖 子供に対する愛情は男性よりも女性の方が強いことが原則である。母性愛、この本能を女性が抹殺出来る時は女性としての本質を失っていることになるから神に反逆している。神に反逆した時、人生の幸福を永遠に求むることは不可能だ。子供が水に溺れんとする時、また電車の幕進せる線路に子供が無邪気に遊んでいる時、母は無条件に飛び込んで子供と共に死んだ例も少なくない。産まれた子供、産まれる子供に対しても母性愛は同じなんだ。子供のための母は強い。1万円の金が生産するものではない。月満ちて神が生産させるのだ。心を病んだ女性が路傍に出産し、その子が育っている事実も日聖は知っている。金がなくとも子は産まれ、また育つものだ。世間に対するそれはあまりにも飾り過ぎる。墮胎でも金はいらんのだ。子供のためにはいかなる犠牲でも払って敢然として進むところに女性のみが持つ幸福があるのだよ。最低限の生活に切りつめ、子供のために懸命の努力をしてもなおかつ生活苦なれば、日聖はその子を育ててやる。1人増やせば、神はまた生きていけるように道を開いてくれる。元気を出して産みなさい。夫婦が性的発情して性交する事実は神ながらである。素直に神に従うこの行為

を前提として当然来たるべき妊娠を否定する自己矛盾、こうした反神的行為は結局不幸を招来する事実を静思する必要があると思う。

婦人 先生、ありがとうございます。何かしら目頭が熱くなる思いです。神に背反した私の心を私自身が嫌厭を感じる程です。産まれた子は先生が引き取って育ててやるのお言葉、ありがとうございます。最低限に生活を切りつめてもきつと私が育て上げます。ただ、ここに母の心と致しまして、このような貧困な家庭に産まれてきたこの子が大きくなるにつけ、まっすぐにひがまず伸びてくれるかどうか、かえって産ませて小さい時から苦労をかけるよりは、世間に迷惑をかけるよりは産まなかつた方がと思うことが起らないでしょうか。

日聖 避妊、墮胎が神への反逆的行為であることが分かれたようであらうけれど、まず産むことだ。子供の肉体は親から出来るのだが、その子供の運命なり精神は神から与えられるものだから、産まぬ先から子供の将来についてとやかく心配する必要はない。要は人間社会に何か必要あればこそ産まれてくるものなんだ。いかなる子供が産まれても、それには必ずその子の産まれるべき理由があるはずだ。せつかく受胎しても墮胎したとすれば、産まれてくる子供の社会的必要性を親が抹殺することになり、完全なる社会は生まれてこないことになる。人間が生きている諸条件の中で経済はその一部分の存在に過ぎない。こうした小さな問題にこだわって神意に背いた時、その結果はどうなるか。お分かりと思う。不自然行為は大いに慎まねばなるまい。

婦人 はい、よく分かりました。何かしら力強いものが満ち満ちて参りました。最後のときは先生の腕にすがりに参ります。どうか今後共よろしくお願い致します。

世にかかる婦人が数多ある事を思う時、それら婦人の真情あわれむと共に、それらの不幸な意志薄弱な人々の現実面にも精神面にも救済・幸福の道を我らは計り講じております。いかなるご相談にも応じます。ぜひ一度は法主日聖の肚を叩きに来てください。

令和5年5月29日～6月5日

こもれる魂魄の地を訪ねて (第54回)

## 東北・北海道の旅

杉本 順一

### その7 モヨロ人、網走監獄

6月4日(8時40分) 屈斜路プリンスホテル出発、網走方面へ。ホテルから30分的美幌峠で龍神さんたちにご挨拶。この後、昨日「弟子屈屈斜路コタンアイヌ民族資料館」で見た映画『キタキツネの霊送り』に出てきた狐さんが「恐怖や恨みの心」などを祓い清めて、霊界に居させてほしいと言ってきたので慰霊の心をもって鎮魂。

メルヘンの丘で北海道らしい風景を眺める。(11時10分) 車中で駅弁を食べ「モヨロ貝塚館」へ。

○モヨロ貝塚館行きを旅行日程に入れた理由  
もう50年以上前だが、私がお世話になっている床屋さんで順番待ちのため、新聞社発行の週刊誌を見ることがあった。

ある時、母と2人の娘が写る1枚の写真があった。写真と言っても新聞の写真程度のきめの粗いモノだった。そこに「この3人が北海道にいる最後の家族です」との説明があった。

明らかに顔がアイヌの人たちとは違っていた。修学旅行以来、北海道にはアイヌ系の人か和人しかいないと思っていた私は驚き、謎に包まれた。「謎の3人家族」のことは、日常生活の中で話題に出ることもなかった。

法主に教わった惟神(かんながら)の3要素(時・所・人)とはこういうことか! 娘が網走監獄の周辺を訪ねるべき遺跡、慰霊碑、記念碑などをインターネットで検索中にモヨロ貝塚とその資料館を見つけた。その霊人から貝塚に来るように言われたらしい。展示物の写真を見せられて、私はすぐあの「謎の3人家族」を思い出し、そこに行こうと決めた。

(11時40分) まず貝塚展示室に入る前に、モヨロの人達が実際に暮らした住居跡、貝塚、墓地等を見学。(11時50分) 展示室に入る。パンフレットには「古代オホーツク海へー 網走川の河口にあるモヨロ貝塚は、今から約1300年前の網走に暮らした「モヨロ人」のムラあとです。北からの渡来民族であったモヨロ人の暮らしは「オホーツク文化」と呼ばれる独特なものでした。「オホーツク文化」をはじめ明らかにした「モヨロ貝塚」の発見から100年、北の海に生きた人々の暮らしがよみがえります」とあった。

「北海に活きる海洋狩猟民」をテーマにした一面に北海の大写真があり、その海に居る動物を小舟に乗って釣(も)る狙(め)うモヨロ人の模型があった。そのモヨロ人の顔に注目した。あの3人家族の人たちの顔であった。ああ謎が解けた。

(13時00分) 姿の見えないモヨロの人たちとお別れして、次に出発。後日、旅行記執筆中に「われら今もここにいることを忘れ召さるな」とモヨロの霊人が言う。

(13時30分) 旧網走監獄に到着。入館してすぐス

コールみたいな雨。正門に入った所で私は急に腰痛を起す。旅行中の車の乗り過ぎかと思ったが痛みが消えた。旧網走監獄舎房及び中央見張所に入り見学していこうとしたが、また激痛がくる。この感じ方は普通ではないと思い、末娘と駐車場まで引き返した。痛みは無くなっていた。厳しい生き方を強制された人間の想念が監獄内至る所に重く滞っているらしい。

長女と家内は「監獄歴史館」にも行ったらしい。感想を聞いたら、厳しかったとのこと。歴史館で観られる中央道路の開削をテーマにした7分の映像作品『赫い囚徒の森 知られざる220キロの苦難』は必見とのこと。以下内容。

《明治維新後、富国強兵を推し進める新政府にとって、資源の宝庫とされる未開の蝦夷地の開拓と、ロシア帝国の南下施策に対する北の防備のための開拓が急務となっていた。》

国内では明治維新後の変動期を経て新政府に対する不満が渦巻き、不穏な空気が漂う社会で犯罪者が急増。さらに西南の役などをはじめとする内乱が相次ぎ、国事犯、政治犯が続出、全国的に監獄は過剰拘禁となっていた。

未開の広大で肥沃な大地、ロシアからの北の守りを進めるうえで北海道開拓は富国強兵を進める新政府の急務であった。これら開拓の作業に囚人を充てるため、明治14年より北海道に大規模な集治監の建設と移送が進められていった。

「懲罰として苦役させれば工事が安く上がり、たとえ死んでも監獄費の節約になり、一挙両得である」との囚人の苦役論が支持された時代、網走刑務所からは中央道路開削工事のため明治23年1200人もの囚人が送り込まれた。

逃走防止の鎖や鉄球をつけたまま昼夜を問わず続く過酷を極めた作業に加え、網走から離れるに

つれ届かなくなる食料、工事で命を落とした囚人は211名にもなった。この区間は「囚人道路」と呼ばれ、囚人労働史上最も悲惨な事例とされている》

榎本守恵著『北海道の歴史』（北海道新聞社）によると、『囚人道路の強制労働は』人道問題として日清戦争頃から影を潜めた。代わって登場するのが監獄部屋・タコ部屋である。明治20年代初頭、九州の高島炭鉱の奴隷的労働の問題がジャーナリズムを騒がせた。官憲も経営者資本側に立つて監獄部屋・タコ部屋を取り締まった。同じように周旋屋に騙され、飯場に閉じ込められて、想像を絶するような非人間的扱い・過酷な労働・搾取は、北海道のその後の道路工事や鉄道工事に常用され、それは、第二次大戦後の札幌市真駒内の米軍施設工事の頃まで続いていたのであるとある。北海道の旅を終えるに当たり、今思うことはこの地の近代化（日本の発展・幸せになるための方向）のために、とんでもない手段をとってしまった。近代化のために捨て石にされて、今も厳然として幽界にある方たちへの慰霊と鎮魂、だけではなくせひとも感謝の気持ちを添えねばならないと感じた次第です。

6月5日 月曜日、旅行最終日。（8時00分）起床、部屋の窓からよく見えるモロコ貝塚辺りとその東に見えるオホーツク海に心魅かれる。（8時50分）網走セントラルホテル出発。（10時55分）女満別空港出発。レンタカーにも感謝。（14時55分）新千歳空港で乗り継いで伊丹空港に到着。（16時30分）無事、紫陽花邑に帰邑。

私たちの旅行中、土日以外の日は岸田哲・林修三のお2人に全くのご好意で教務本庁への来訪者や電話番号などを務めていただきました。

## 地下水

### 保健か、スタイルか？

法主様がかつての機関紙『大倭』の「地下水」というコラムで書かれた文章を、今年の本紙8月号に続き本号でも再録させていただきます。再録にあたり読みやすさに配慮して、掲載当時の原文にある旧字体漢字などの一部表記などを適宜改めています。（編集部）

◆ 静止することを知らないで一切のものは変化している。人間生活そのものも流転の歴史である。多くの人は新しきを求めて文化生活と称し、時代に遅れまいと努力している。けれども進歩的文化に陥っている場合もあるかも知れない。幸福であるべき文化生活を蝕んでゆくものもまた文化であることを知る必要がある。

◆ ここで取り上げたいことは、最近目立つ若き婦女子の服装の問題である。

「かぶれる」「懂れる」といった流行病は実に恐ろしい。中には自分自身を忘却する者すらある。時代のセンスであろうが八頭身形のスタイルに憧れる若き婦女子の気持ちはよく分かるが、もともと人類は何がため衣類を身にまとわなければならぬか、保健のためか、装飾のためか、もちろん両者を具備しているが、保健が第一義であろう。日本民族の血を受け、日本の領土に古くから生息している我々が、こうした根本的条件を無視して、外観のみ欧米にかぶれることは鵜のまねする

## 法主 矢追日聖

鳥のごとき危険性が多分にあると言わねばなるまい。

現代の珍現象として見られるものに、20代の婦女子が、頭痛や耳鳴り、神経痛、肩のこり、あるいは横腹の筋が引く、足がつる、医師の治療ではどうもはつきりしないからと大本宮に詣られるといった種類が挙げられる、誠に哀れな人たちである。と言うのは、これらの人は自分の体でありながら自分の体質を知らない、健康を保つに必要とする体温確保の限度が分からない。鳥獣にも恥ずべきだ。スタイルを考慮することも芸術的であり、人生の潤いであるから悪くはないが、健康を損ねてまで薄着する者が、果たして文化人と言えるだろうか？（昭和32年10月1日）

### 表紙写真について

昭和42年12月23日発行『すさのお』15号掲載。「片山津開拓地に於ける座談会」と説明がある。15号に法主の思い出記事があり、一部を転載。《暮しの中の敬虔

……老人がその大部分を占めていた関係かも知れないが、その話の内容は自己紹介に近い私の過去の遍歴や、大倭の在りのままなる姿を知らせたに過ぎなかったが、四時まで与えられた時間なのに知らぬ間に一時間以上経過しているのに気付いて驚いた。水を打ったような静粛な聞く態度からくる彼等の気脈は、異様な霊波となつてひしひしと私の心に響いてくる。涙がでる程うれしかった。あちこちで念仏の声がかすかに聞こえていた。心から在りし日の親鸞上人の御徳を偲びながら降壇したのである》



# あじさい日記

9月8日 午後1時から大倭会館で故・溝口ツヤ子さんの一年祭が行われ、祭典後大倭墓地の大倭巨人慰霊鎮魂碑の前でごあいさつしました。

この後、大倭拝殿で大倭会主催の祓会が開かれました。

9月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

交流の家では午前中にNPO法人むすびの家の理事会が開かれ、午後から総会と定例委員会が行われました。青山法義さんが新たにNPO法人の理事に就任しました。

9月18日 朝から瑞光院の雨水処理工事をしていただきました。

9月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。

この日は昭和41年9月23日の法話をお聞きました。

9月24日 午後5時から教務本庁で本紙『とおやまと』の編集会議が開かれました。

10月2日 午後5時から本紙『とおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

10月5日 今年2月9日に帰幽された岸野春子さんの分骨が、生前の彼女の相方さんであった今村忠生さんの遺骨の入る墓地に埋葬されました。忠生さんの弟・昌生氏ほか岸野さん旧知の5名が納骨に参加しました。



午後6時から大倭会館において、大倭町自治会の役員会が開かれました。

10月6日 午前8時から大倭墓地の枯れ葉集めの大掃除、今回は早く終わったので、邑にある土師の杜の大掃除も行われました。

午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館で大倭安宿苑では

9月26日 午前10時半より応接間にて理事長から長曽根寮の介護士に資格取得手当を授与しました。

(菅原園)

9月18日 午後から交流ホールで、おやつ作りを行いました。

7月に行ったアイスクリームサウンデーが好評だったので同じメニューで実施しました。残暑が続く中、大変喜んで食べてもらえました。

10月5日 午後から交流ホールにて誕生日会を行いました。誕生日の方を中心に、誕生日の歌を歌い、目の前でケーキがデコレーションされる様子を楽しみました。ケーキが完成すると、全員で「おめでとう！」と声を合わせてお祝いし、最後は皆でケーキを味わいながら心温まるひとときを過ごしました。

(須加宮寮)

9月10日 書道クラブで12月に行われる奈良県障害者作品展に向けての作品づくりを行いました。お手本を見ながら、真剣に取り組んでいました。

9月26日 須加宮寮厨房出火想定で合同防災避難訓練を行いました。階段で避難できる方は玄関前ピロティへ、車椅子や歩行器の方で階段使用が難しい方は各フロアのエレベーター前へ避難をしました。

(長曽根寮)

9月16日 (デイ) 敬老会で職員手作りの巨大掛けパズルと記念品でお祝いをしました。

9月19日 (特養) 奈良県の男性最高齢者に県職員からお祝いの授与式が盛大に行われました。

そのご利用者は9月25日で109歳になりました。

9月22日 (特養) フロアにてお月見の飾り付けを行い、十五夜の音楽を流してレクリエーションも行い季節を感じてもらいました。

(茂毛路園)

9月30日 月に1回散髪屋さん

が来られてカトルルームで散髪を実施しています。この日は6名が利用され、「スツキリしました」と満足の様子でした。

(八重垣園)

9月27日 施設周辺を散歩し、咲いている花や景色に秋を感じてもらいました。

10月6日 4名が買い物外出でスーパーセンターオークワへ行き、ショッピングを楽しみました。

■彼岸花は例年お彼岸のころに開花しますが、今年は地球温暖化の影響もあってか大本宮でも開花がだいぶ遅くなりました。



群馬県富岡市 西川美穂

私も10歳で難病が見つかり、もう40年が経ちました。今もこのように皆様方のおかげで生きていられます。

法主様と出逢う前は、常に「どうして私だけ辛い思いをするの」と悲観の日々との戦いでした。法主様との出逢いがあった、今世で何らかの私のお役目

があり、まだ、まだ、まだですが、生きる意味がある事を知りました。今もなお、迷い苦しみがありますが、法主様の思い、お心を胸に刻んで皆様と仲良く限りある人生を笑顔で過ごしていきたいと思っています。

そして少し…ゆっくりと楽に生きたいのですが、駄目でしょうか。

群馬より皆様の幸せを願っております。感謝

## あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
11月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会文化講演会  
11月10日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。「戦没者遺骨の戦後史」未完の戦争」講師 栗原俊雄氏(毎日新聞 学芸部記者)

第2次世界大戦の終戦から80年近くが過ぎた今も、亡くなった肉親のことを忘れられないで苦しんでいる人がたくさんいる。その事実を広く伝え、戦争が起ると被害は庶民に広く深く及ぶことを知ってもらい、新しい戦争を防ぐこと……。

\*月次祭(大倭神宮)  
11月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮)  
11月23日(祝・土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。